
かく戦えり ~近代ハルケギニア史~ 平民よ立ち上がれ

アクエリアス1

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かく戦えり ～近代ハルケギニア史～ 平民よ立ち上がれ

【Nコード】

N1843Y

【作者名】

アクエリアス1

【あらすじ】

原作全く読んでいません。2次小説のみです。様々な作者様のアンチ作品に触発されてアンチ貴族、アンチします。オリ主が才人と共にに召喚されてアンチします。不快な方は結構です。感想は返しませんので！
批判クソ喰らえ！

プロローグ

まっ白い空間に目の前に白髭を生やしている老人がいた。

「ごめんちゃい〜 うっかり殺しちゃったよ〜」

「なんだとコラ」

「元の世界じゃ肉体は火葬されたわい！そのかわり行きたい世界とチート能力をやるぞい」

「じゃあ、行き先はゼロ魔。とあるの一方さんの能力に王の財宝、黄金生成能力等の黄金律、あらゆる宇宙世界の本棚、クリエイト能力、半径1kmの魔法無効化能力、北斗神拳正統伝承者ケンシロウの体術と拳法、H×Hの強化系中心の念能力、ルーン洗脳解除……以上だ！」

「よし……チート能力入力！！行ってこ〜い！！」

「あんたら誰？」

目の前にはピンク頭の美少女と傍らには青いパーカーを着た少年がいた。

才人の地球へ脱出（前書き）

才人の地球へ脱出

俺の名前は、……………、忘れた……………、名前は？いいや
造っちゃえ！ 霞 十兵衛。ジュウベイだ！

「あんたら誰よ……………」

「俺は、ジュウベイ。こっちがサイト」

周りがざわざわとうるさく騒ぎ出す。

「ゼロが平民二人を召喚した。やっぱり期待を裏切らない」

その言葉で周りの生徒たちの笑い声が更に大きくなる。ルイズはど
んどん不機嫌になっていった。

「ミスタ・コルベール！」

「なんだね。ミス・ヴァリエール」

「もう一度召喚させてください！」

「それはダメだ」

「何故ですか？」

「この儀式はメイジとして一生を決める大事なもの。やり直すなど
儀式そのものに対する冒涇ですぞ。君が好むと好まざると彼は君の
使い魔に決まったのです。」

「でも！ 平民を使い魔にするなんて聞いたことがありません！」
隣には才人がボケ〜としている。ハゲも俺らを只の平民だと思っている。

「か、感謝しなさいよ。普通、平民が貴族にこんな事されるなんて一生無いんだからね」

ルイズは才人に近づいた。そして目を瞑る。

「はい？」

才人がマヌケな声を上げる。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブランド・ラ・ヴァリエール。5つの力を司るペンタゴン。この者らに祝福を与え、我が使い魔と成せ」

ルイズは才人にキスをした。

キスを終えて、唇を離すと突然、才人の体が熱くなり、左手が禿るのではと思うくらいに痛み、なにやら古そうな文字が刻まれていく。

「何だ、コレ！お前、何しやがった！」

「使い魔のルーンが刻まれているだけよ、直ぐに終わるわ」

「刻むな、んなモン！」

痛みに耐えつつ、ルイズに必死に食い下がる才人。ジユウベイの左手にも同じような文字紋章が現れた。ガンダで決定。

そのあとハゲがスケッチさせてくれと言い2人ともスケッチさせた。才人は気絶している……。そのあとは才人を”活”で起してルイズの部屋に移動して使い魔の心得とか聞いて洗濯モノ任せられて就寝。

1時間程して

「おい！才人起きろ……」

「エンにゃ……！」

「シ！さて！脱出するぞ！着いてこい。静かに、ぼさつとするな」
才人を連れて廊下に出ていくと金髪の野郎が女生徒をナンパしている所に出くわした。こいつあのギーシュだな。殺つとくか。

ジユウベイはギーシュの背後に立ち肩を叩いた。

「埃が着いていますよ貴族様」

「なんだ！触るな」

「ギーシュ様に触らないでください」

上等だ！念能力で携帯している杖を斬った。

「申し訳ございません。それでは……行こうぜ才人」

「ああ！」

一言文句を言いちよっかいを掛けようとギーシュは薔薇の杖を取りだしたが折れていた。

「ちよつと待ちたまえ……杖が……」

ジウウベイは、秘孔を着いて数時間後にギーシュが肉体爆死するようにセットした。そして自室のベットで帰らぬ人となり”決闘”フラグやシエスタの絡むフラグを折るのである。

ジウウベイは才人と話しながら歩いていた。

「これから人と会ってお前の地球に戻るぜ」

「俺の地球？……てどう言うことなんだ」

「兎に角、この世界は危険が一杯だ！お前はゲームでしかファンタジー世界を知らないが、この世界は悪魔の世界だ」

女子寮を降りて水場へ向かうと黒髪のメイドを見つけた。

「あなたは、シエスタさんですか？」

「あなたは、ええと確かミス・ヴァリエールに召喚された方々」

「そうだ。君の肉親に佐々木武雄さんっている？」

「私の曾お爺ちゃんです」

「ビンゴ！」

「私はヴァリエール嬢に召喚される時に佐々木武雄さんに会ったんですよ。君への伝言で”明日でも早く魔法学院を辞めなさい”とそれは君に死の危険が迫っているからだ」と

「え！曾お爺ちゃんが・・・私に死の危険・・・」

「それとこれ渡しておきます。武雄さんからのプレゼント」

黄金生成して純度100%のピー玉10個分の金を渡した。

「これだけあれば実家は大丈夫。伝言伝えたから武雄爺ちゃんの言うことを聞かないで死んでも俺のせいにしないでね！自分が言うことを聞かないから自分が悪いのであるから」

「これは・・・」

「武雄さんからのだから。またタルブへ行くからその時はよろしくね！行くぜ才人」

「ナニ・・・どうなってんの？」

「話は後だ」

「人がいない所へ来て”本棚”と”クリエイイト能力”で小型次元航行艦を造り、才人の地球世界へと脱出した。」

地球での橋頭保確保とテルフGET

才人を日比谷公園に降ろしたジユウベイは”王の財宝”の中に航空機を収納して、この地球世界に自分の存在があるのかを確かめようとした。

免許証には、”霞 十兵衛” 東京都@区・・・・・・”よ
し行ってみよう・・・・・・”

十兵衛の家

どうやら俺は、この世界では天涯孤独の身だ。鍵もポストの中にあるし・・・・・・年齢は24歳。両親は、10年前に他界し親戚がいない・・・・今現在就職中・・・・・・記憶の書き換えかよ！

(どうじゃの！これで勘弁してくれんかの)

「ああ！許してやるよ」

(達者での)

さあて貿易会社でも造りましょうか！黄金律スキルあるからまずは投資や競馬で一攫千金だ！

ルイズの使い魔？！原作なんか無視してしまえ！使い魔なんかのバカなクソ話なんか知るか！滅んでしまえトリスティン！くたばれクソルイズ。

さつそくネットFX100倍で大金をGET。1億3千万GET。
翌朝の府中競馬場で7千万GET。

会社は、資本金一億で会社名「霞商事」で決定。

近所のビルの一室も借りて法務省に会社申請も出してと！

太平洋戦争での戦死者で、ニューギニア戦線において「佐々木武雄」氏の戦死を確認できた。ゼロ戦手に入れたら大村益次郎像前に放置しよう。

あれから4日過ぎて王都トリスティンへ来たジユウベイ。中世ヨーロッパの街並み・・・狭いしダメだなこの国は・・・
しばらくして歩いていると、何やら騒がしい。見てみると貴族が土下座をしている母子を無礼討ちにしようとしている。

「この家畜の分際でこの私にぶつかるとは、手打ちにしてくれる」

「お許しください・・・」

「いらつしゃい」

親父がパイプ吹かしている。いい気なもんだぜ。

「親父、ここにデルフリンガーって名の剣知らないか？」

テーブルに爆死したモットからくすねた財布の中から金貨100枚を置いた。ついでに黄金生成して金粒10個もだ！

「こんなに！おいデル公、お客さんだ！」

「やいてめー何モンだ」

「おいデル公、貴族様に溶かしてもらつぞ」

「もうこの世に飽き飽きした所だ。溶かすもんなら溶かしてみろ」

ジウウベイは声のする方へ行き、「ゼロ魔」のアニメで見ていたそれらしき剣を取った。

「やい触るな……って、おめー使いてか?!」

「そつだ使い手だ。よろしくな相棒」

デルフをGETしたジウウベイは一路タルブへ向かった。

ゼロ戦とタルフ

デルフをGETしたジュウベイは、ストライカー装甲車で一路ま
ずは、世界樹がある都市ラ・ロシエールへと向かった。タルブつて
その近くにあるから。

「カッカッカ！相棒うれしいね、馬なしで速く走れるなんて」

「どうだ異世界の兵器の一つだぜ」

「ところで相棒、主人はどうした？」

「逃げて来た。使い魔なんかやってられっか。おまけに武器持った
ら体が軽いし洗脳効果なんて除去してあるんだぜ」

デルフに召喚時の”老人”にチート能力を与えられたいきさつを話
した。

「そりゃあいいねえ。主人に反逆する使い魔か」

ファンタジー世界には、AMF等の魔法無効化装置が必須である。
トリステインの王家・貴族を一人残らず皆殺しにした後には、メイ
ジの犯罪を防ぐためにも地球世界でAMFをどこかのメーカーか下
町の工場に製造を依頼して大量生産するべしですね。

ストライカー装甲車でラ・ロシエールの町に入った。遠くからでかい木が見えているしそれを目標に道を進んでいった。道行く人や畑の農夫はその装甲車に見とれてしまっている。

10m前には、豪華な馬車が1台走っていた。さてはクソ貴族だな。12・7mm重機関銃M2で3台とも木端微塵にした。

ダ！

近代兵器はすごいね。木端微塵にした残骸を踏みつぶした装甲車は町に到着。

王の財宝へ装甲車を収納して食堂へ飯を食べるために休憩を取った。タルブ村への道を店主へと聞いた。

勘定を払い食堂を出て行くこうとすると、黒髪の少女にぶつかった。

「君は、タルブ村の人か？」

すると女店主が

「その子は数年前、貴族に両親を目の前で殺されてそのショックで口がきけないんだよ」

「そうですか」

ジュウベイはその少女の頭に手を伸ばし

少女の頭にスパーク！！

「お客さん何を？」

「しゃべれるようにおまじないをしたのさ！あとはこの子の心の叫びだ」

どうやら少女は世話になっている親戚の伯父とタルブ村からワインを配達しているところであったので帰りにタルブまで道案内させてもらおうと一緒にタルブへと店の表にある荷台に載せてもらった。その親戚が、シエスタの父親であった。なんでもシエスタは魔法学院のメイドをしていたが辞めて村へと帰っていた。

村へ着くと看板には日本語で『ようこそタルブ村へ』と書いてあった。村の方を見ると、草色の木綿のシャツに茶色のスカート、それに木の靴を履いたシエスタが手を振りながら笑顔で駆けてきていた。

「おかえりなさいお父さん。エミーありがとうね。あれ！あなたは・・・」

「又、会ったね。実はだな武雄さんのお墓参りに来ていたんだ」

「知り合いなのか？シエスタ」

「魔法学院の貴族生徒に召喚された方です」

「申しおくれたが、俺の名前は姓がカスミ。名が十兵衛。ジュウベ

イと呼んでくれ」

「ジユウベイさんミス・ヴァリエールが落ち込んでいましたよ」

「知らねえなそんな奴。召喚時にあの世の武雄老から魔法学院から逃げ出せと言われて逃げたんだ。それにルイズが俺を殺そうとしていたんだぜ。この紋章で、未来が読めるようになってしまった。タルブに来たのもそのお墓参りだ」

嘘です。武器の所持による肉体強化のみですね。ゼロ戦もGETする為です。

その後、佐々木武雄さんの御墓へ冥福を祈った。

『大日本帝国海軍少尉 佐々木武雄 異界に眠る』

原作通りだ。ゼロ戦もGETして王の財宝の中へ収納した。シエスタらは驚いたが、

「あのクソ貴族から刻まれた紋章の力だよ。本当に困ってしまうな！あのバカ貴族だけは！」

つで切れながら弁解した。

その夜は「ヨシエナベ」をシエスタの実家で堪能した。シエスタ宅で武雄老が書き残した日記を見つけた。

なんでもあの中野学校出身であり、平民の秘密結社を造って貴族中心社会を転覆しようと動いていること等を書かれた。

「読めるんですかその日記。このことを聞いてしまえば、もう後には引けません。それに貴族に命を狙われることになるかも知れませんが、その覚悟はありますか？」

「フン！上等！俺は貴族やブリミル社会に破滅と絶望をもたらす死神だ」

でた〜中2病発言。

あきれたその答えを聞いたシエスタは仕方ありませんね、と言った様子で目を閉じてゆっくりと息を吐いた。
そしてはつきりとした声でジュウベイに言った。

「デモクラシー」

大正時代の民本主義。民主主義か！大正生まれらしいや。
それに対してシエスタは先程までの重々しさとは一転して解説する
かのように説明調で言った。

「ええ、私のひいおじいちゃんが作った組織なんです」

放置こそアソチの真髓也(前書き)

がろつでんさんからパクリ許可とご指導を貰いました(――)

放置こそアンチの真髓也

タルブのシエスタ宅に一泊した次の日には、シエスタからハルケギニアの文字を習得していた。佐々木一族は、武雄老から日本語や戦前の文章体を習っている。日記には、そう書いているぜ。

IQ増幅剤をクリエイトで造って投与し、短時間でハルケギニア文字を習得できた。ゼロ戦は、一旦地球世界の日本・靖国神社の大村益次郎像前に放置。デルフは地球世界じゃ起動しない・・・ってことは、メイジは魔法が発動出来ないことなのか！

タルブ滞在、2日目の晩にハゲことコルベールが『龍の羽衣』を見たいとシエスタ宅へと訪問してきた。

「おや、君は・・・たしかミス・ヴァリエールの使い魔の・・・

」
「逃げさせて貰った。ついでに洗脳効果なんてないぜ」

「では、なぜ逃げたのかね！ミス・ヴァリエールは大貴族なのですよ。将来も保障されるし。ところで君は人を殺しましたね」

その言葉にジュウベイはビクン、と反応した。わかり人間にはわかるね。

「将来の保障？バカ言っちゃいけないよ。給金なんか出ないし！このルーンが未来のことを教えてくれるぜ。このままだとヴァリエール家に密かに始末されるってな。あのクソ女は元気でやっとなるのか？王都トリスタニアでモットとかいうクソ貴族を殺したよ。じゃな

「かつたら平民の母子殺されていたんだぜ。ルイズ元気にやっているか？」

「つい先日ミス・ヴァリエールは、退学しました」

「そりゃいいや。はっはっはっはっは」

「あなたは……………」

「俺を殺そうとした奴なんか同情しねえよ。ダンゲルテールの大虐殺者さん」

「！何故それを……………」

「いざという時の為に魔法無効化能力を発動させた。その中ではデルフは起動状態である。」

「このルーンのおかげであんたの後ろに『ダンゲルテールの恨みじや〜』ってほざいている幽霊がたくさんついているのが見えるからだ」

「……………！！！」

「あんたは偽善者だ！それにトリステインが弱体化する原因はあんたら教師にあるんだ。なぜ貴族が平民を虐待するような国を造るんだ。それを正すのがあんたら教師の役目じゃないのか。そんな国滅んで当然だ！もうじき近くの国でレコン・キスタが政権を奪取してアルビオンを乗っ取り、トリステインを占領するぜ！それがなくてモトリステインは破産して潰れるから。平民がいなくなれば税金が取れなくなり破産するのは当たり前だ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「図星で反論できないのか！フン！あなたには、教師の器と資格ないから」

「私に教師の資格がないと・・・」

「俺ともう一人の奴が召喚されたとき、

1つルイズの悪口している生徒を注意しなかった

2つ貴族生徒に人間観を教えていない

3つ召喚された人間の世話を人間性最悪のルイズにまかしている

4つ魔法以外にも人間としての生き方を教えていない

まだまだあるさ」

「おめくら教師はルイズが退学して奴の実家から寄付金ないのが痛いだけじゃん。俺が使い魔に協力するわけねえだろ。もう一方の方割れは、元の世界で家族とよろしくやってるぜ。人間家族が一番、使い魔奴隷なんかクソ食らえ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「言葉見つからないか、ミスタは『龍の羽衣』を拝見しに来たんだろ。もうあれは、元の世界へ返したぜ。ここにはありません。なんなら俺の世界へ行ってみるかい」

「え?! 龍の羽衣がない。君の世界・・・ロバ・アル・カリイエなのかい?」

「そんな所じゃないぜ」

ジユウベイは、表に出て次元航空機を王の財宝から取り出した。

「それは・・・?」

「はい、乗った乗った。」

東京・秋葉原

「うわ〜! ここは・・・」

中世の魔法使い風のハゲが騒いでいる・・・、ジユウベイは他人のふりをした。ってこのハゲは、元アカデミーの汚れ役だろ。スパイも経験してんだろ・・・。

あのはしやぎ様は、異常だね。航空機を降りてハゲが魔法の発動が出来ないことを確認したし・・・あのままほっとくか。あと

は知らね

よし、放置

現金100万渡しているから大丈夫だろう(？)と素早く人ごみに消えるジュウベイであった。

放置こそアンチの真髓也（後書き）

ハゲよ現金100万渡したことをありがたいと思いな。

魔法・言葉・権威権力が使えない世界でどう過ごすのか。

キモいゼスカロンさん（前書き）

地球世界に放置されたコルベールの運命はいかに？ルイズの動向は？トングラは原作破壊そのモノ。

使い魔やって何になる？所詮、屑貴族の厨二秒ですね。

キモいぜスカロンさん

ロマリア

「うーん、トリステインの虚無の使い魔は2人ですか。2人と主人から逃げられている」

「どうします」

「様子見と行きましょう」

「まだ動く時ではないということですね」

「使い魔を召喚したのは、我が国ロマリアと隣国ガリア、そしてトリステイン。アルビオンの虚無はまだですね。トリステインの虚無は2人を召喚」

「トリステインの虚無の使い魔はいつも覗いている異世界と行き来できる船があるとは……。動きが読めません聖下。しかもあの世界の兵器は我が世界にとって脅威です」

「聖地奪回しても平民がああ兵器を持てば、我らマジ族は破滅ですよ」

ロマリアの2人組のクソ共は、こうして時々覗き見をしていた。

(あいつらは、相変わらず覗き見しとるの〜！あのブリミルの末裔共は性質が悪いからの〜。ブリミルの末裔共め！マジ族め！いずれ地獄に落としてやるわい。せいぜいあいつらは見ているだけじゃ)

タルブ・佐々木一家から武雄老の分骨を滋賀県の家族の元へ送り届けたジュウベイは、再びトリステイン王都トリスタニアの「魅惑の妖精亭」へシエスタと共に訪れた。

日本・佐々木一族に政府関係者がいたので、事務所がある東京で会ってハルケギニアの平民革命工作等に協力してもらうつもりである。なぜ魅惑の妖精亭につて？そりゃ武雄老が造った平民結社「デモクラシー」の取りまとめをしているのが、スカロンさんなのです。

シエスタと共にスカロンさんと会つと………キモ！！！！新宿2丁目のオカマだね。

皮をなめしたハーフパンツに大きく胸の開いた派手な色のランニング。その上にはつやつやとした胸毛と整えられた顎鬚が見える。

「は〜い！シエスタちゃんいらっしやい？こちらの殿方は？」

「私は、武雄さんと同じ国の出身の人間で、カスミ ジュウベイ。ジュウベイって呼んでください」

「私はスカロン。よろしくね？」

女房を亡くなったショックでオカマになったのかな？それとも周りの目をごまかす為？日本の佐々木一族は甲賀忍者の流れをくんでい

るし、武雄老もあの中野学校出身だし……
長年続けることによって次第に地になつたかも……（><）怖い
ね……

スカロンさんは、武雄老や母親から忍びの術や工作術の手ほどきや
訓練を受けていて、デモクラシーの取りまとめ役でもある。

スカロンさんとデモクラシー傘下のギルドと取引や新天地の開拓と
建国をシエスタを交えて話し合った。

まずは日本で安く手に入れた大量の日用品・食糧をギルドに売り込
む方針である。

また、ハルケギニアを含むこの惑星全体を把握して、無人無政府状
態の土地があればハルケギニアの流民をデモクラシーを通じて移住
させて建国させるつもりだ。

妖精亭のオーナー室で長い時間、デモクラシーのジユウベイに対す
る協力体制について話し合った。

夜まで話は続けられ、店のカウンターのほうを見ると緑の髪の毛
の女性が一人、木杯を傾けている。

「しっかし、これはどうしたモンかねえ」

一人小声で愚痴る彼女の背後に背負われた背囊の中には魔法学院の
宝物庫から奪った『破壊の杖』が仕舞われていた。
杖と呼ぶには少々太く重い、全長30 سانتほどの棒状のマジック
アイテム。

固定化の恩恵によって製造されてから30年近く　最もマチルダ

はもとよりこの世界の誰もわからないが 経った筈の本体は新品同様の輝きを維持していた。

しかし、マチルダには使い方はおろか、ガラス繊維強化プラスチックで出来た外装の材質が何で出来ているのかすらわからないという代物だったのだ。

「全く、魔法学院の教師つても臆病者の集まりってわけさね」

せっかく伝説のマジックアイテムを手に入れたのに、その使い方が判らなければ碌な値も付かない。盗んだは良いものの、使い方のわからない『破壊の杖』を何とかする為に仕掛けた作戦のことだった。しかし、その作戦は成功することはなかった 作戦を見破られたのではない、誰も『破壊の杖』の搜索に志願しなかったのだ。

ワインをチヨビチヨビ飲んでいるマチルダにジユウベイは近づき

「これって地球世界のロケットランチャーですね」

「 あんた、これが何だか知ってるのかい？」

思わず無意識と言っても良いまま尋ねた彼女に対してジユウベイは答える。

「ああ……これは『M72ロケットランチャー』とか言った俺の世界の武器だ」

左手のルーンが輝き、彼の手の中の『破壊の杖』の正体が流れ込んでくる。

そんな聞きなれない言葉に対してマチルダはつい、口走ってしまっ
た。

「ろけつと…らん…ちゃあ？　　はあ？これは『破壊の杖』じゃな
いって言うのかい？」

「これは、マジックアイテムなんかじゃない　　俺の世界の『兵器』
だ」

オーナー室の奥からシエスタとスカロンが出て来た。

「あれ？ミス・ロングビルさんじゃないですか？」

そんなシエスタの発言に思わずそばを通りがかったジェシカが聞き
返す。

「あれー？シエシエ、この人知ってるの？」

「ええ、確かにこの方は魔法学院の秘書をされているミス・ロング
ビルさんですけど　　」

「あなたが、マチルダ・オブ・サウスゴータさんですね。あなたを
雇いたい。詳しくは…．．．スカロンさん、ちょっとマチルダさ
んと仕事について話したいんだけど個室かしてください

「あんだ、その名前をどこで？！」

「取りあえず給金のごとで話し合いますよ」

キモいぜスカロンさん（後書き）

マチルダをGETします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1843y/>

かく戦えり ~近代ハルケギニア史~ 平民よ立ち上がれ

2011年11月8日07時13分発行